

# 空とぶ てんとう虫



**会員交流会**  
生産者を訪ねて余市町・仁木町へ  
(2012年10月13日(土))  
感動!超甘〜い!トマトでした。仲野ファームにて。  
(P5・6掲載)



**大豆畑の交流会**  
今年も晴天に恵まれました!  
大豆畑の見学交流会。収穫した野菜の前で満足顔の参加者。  
(2012年8月25日(土)岩見沢市北村砂浜)  
(P7掲載)

**食育講座**  
全6回の講座を修了した子どもたちはもう立派な「食べ物博士」!  
(2012年11月24日(土))  
(P8掲載)



**発行**

NPO 北海道食の自給ネットワーク  
法人 札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内  
TEL (090) 2818-5502 FAX (011) 789-8890

ホームページアドレス  
<http://jikyuu.net>  
E-mail: info@jikyuu.net

## 2013年の年頭にあたり 改めてTPPを考える

酪農学園大学 特任教授 中原 准一

### 民意の重さ

2012年12月の総選挙は、非常に重要な争点を抱えていた。いうまでもなく、長引く不況、給与切り下げのなか、国民の暮らしに直結する景気浮揚策をどうとっていくのか、もちろん、消費税値上げに関連して、「税と社会保障の一体改革」なる民主、自民、公明3党合意があったが、肝心のこの3党から具体的なアピールはなかったように思う。意図的な争点隠しでなければよいが。

もう一つは、TPP（環太平洋連携協定）についてだが、これは有権者の関心も高かった。民意が各候補者に曖昧な態度をとることを許さなかったといってもよいだろう。また、国民の70%以上は「脱原発」を望んでいるという。果たしてこの民意は、選挙結果に収斂（しゅうれん）したであろうか。例えば、日本未来の党は「脱原発」の受け皿の一つになる可能性をもっていた。しかし、未来の党の嘉田由紀子代表が、生活が第一の党との急ごしらえの政党合併を行なったことに有権者が離反したと思われる。なお、嘉田代表は、2013年早々代表を辞任し滋賀県知事に専念することになった。

争点が明瞭にあったのに、それを民意として受け止めるべき政党の側に弱点があった。政党側がしっかりしていれば、今回の投票率が59.32%などという戦後最低を記録することはなかったはずだ。作家・池澤夏樹氏の次のコメントがリアリティをもつ。「民主党にはもううんざりだ。乱立した小政党はどこもうさんくさい。そうなると残る選択肢は昔なじみの自民党しかない」（池澤夏樹「新春エッセー」『北海道新聞』2013年1月7日付）。

### 道民が突きつけたもの

北海道選出の衆議院議員は、小選挙区12名、比例区8名の計20名だ。北海道新聞社は、総選挙公示前に道内の全候補者を対象に「北電泊原発再稼働問題」などとともに「TPP参加問題について」のアンケートを行なった。開票後、当選者20名のアンケート結果が「道新」紙上（2012年12月18日付）に掲載されたが、興味深い内容を示す。

TPPに関する設問は、①例外なく関税撤廃されても参加すべきだ、②農産物など日本が主張する重要品目の例外が認められれば参加してもよい、③結論を出すまでもう少し慎重に議論を尽くすべきだ、④参加すべきでない、⑤その他・どちらともいえない、の五つで、よく練られている。当選議員20名のアンケート結果は、以下のようなのだ。

さすがに①の参加是認者は一人もいない。いちばん多いのは、④の参加反対論で10名、次いで⑤のその他・どちらともいえないが5名、③の慎重論で4名、②の例外が確保出来れば賛成が1名の順となる。ともかく、道内選出議員の70%にあたる

14名の議員が、TPPに対して反対ないし慎重である、と公約したのだ。この結果は、民意が候補者を動かしたに等しい。議員諸氏には、この数字のもつ意味をしっかりと受け止めてもらいたい。

### 様ざまなアドバルーン

TPPに関して、年明けに与党や政府筋からさまざまな政治的アドバルーンが揚がり始めた。自民党は、第二次大戦後、非常に長く政権についているために党内から様ざまな見解を観測気球のように打ち上げて世論を掴もうとする術に長けているかもしれない。高市早苗政調会長は、TV番組に出演し「(TPPについて)交渉に参加しながら条件が合わなかったら脱退する選択肢もゼロではない」と発言(2013年1月6日)。新聞各紙は、この高市発言を「TPP参加に柔軟」と、おおきく報道した。当然自民党内に波紋が広がる。翌1月7日、同党の細田博之幹事長代行は、BS局の番組で「例外なき関税障壁撤廃を前提とした交渉では到底対応できない。あらかじめギロチンに首を差し出すようなことはすべきでない」と高市発言を強く牽制している。筆者は、この細田発言をTPP交渉参加問題の本質をズバリ衝いていると受け止めた。

現下のTPP交渉は、参加国11か国が丁々発止と戦略・戦術を駆使したたたかいを繰り広げている。周知のようにTPP交渉では、21分野(例外なき関税撤廃を対象とする分野、農産物などの重要品目が該当する。さらに金融、保険、共済等々での市場規制、利用者優遇制度、食品の安全、衛生管理基準、遺伝子組み換え等々の米国が声高に「非関税障壁」といいたてて攻撃してくる広範な分野一物品やサービスの貿易および投資に対する障壁を撤廃すること)の合意目標が提示されており、それらを24部会に分けて11か国が協議を重ねている。2010年以来、TPP交渉はまず9か国(チリ、ニュージーランド、シンガポール、ブルネイ、米国、オーストラリア、ペルー、ベトナム、マレーシア)で開始された。

2012年12月、ニュージーランド・オークランドにおける第15回交渉会合から、新たにカナダ、メキシコの2か国が加わり交渉参加国は11か国となった。この第15回交渉会合でカナダ、メキシコ両国は、TPP交渉参加にさいし「(先行参加の9か国が)すでに合意した条文を全て受け入れる」ことを約束させられている。この事実から、もし日本が参加表明した場合、どのような事態が待ち受けているか、みえてくるようだ。かてて加えて、この2か国は、米国との事前協議ですでに発効(1994年1月1日)している北米自由貿易協定(NAFTA)で合意に至っていなかった品目の追加的な自由化を求められている。カナダやメキシコが不利な立場に立たされているのは明らかだろう。

自民党首脳は、あたかも「条件に合わなかったら脱退する選択肢」があるかのようというが、そのような余地はないであろう。日本国内の強い反対論の緩和を狙うにせよ、その拙劣な思考に唾然とせざるを得ない。すでに民主党政権時代に、政府は2012年3月1日付けで「TPP交渉参加に向けた関係国との協議の結果(米国以外の8か国)」を公表している。その内容は、「全品目の関税撤廃が原則」と明瞭だ。かつ「(協定締結時に関税品目の)90%から95%即時撤廃し、残る関税についても7年以内に段階的に撤廃すべしとの考えを支持している国が多数」と、記されている。今回の総選挙前、安倍晋三自民党総裁は、日本商工会議所幹部との懇談で「『聖域な

き関税撤廃』を突破する交渉力が自民党にはある」と、誇示してみせた。言葉のもつ危うさを感じざるを得ない。

### TPP推進の「別働隊」

小泉純一郎内閣当時のことを思い出してみよう。同首相への高い支持率を背景に、いわゆる「官邸主導型」政治がすすめられたことが、いちばん先に念頭によじる。安倍首相は、この小泉流の政治手法に倣おうとしているのかもしれない。安倍首相は、2013年の年明け早々、産業競争力会議や経済財政諮問会議を矢継ぎ早に設置した。小泉元首相は、経済財政諮問会議などを通じて規制緩和、民間活力活用を合言葉に「構造改革路線」を強力に推進した。そのとき、竹中平蔵氏は経済財政担当相として小泉「構造改革」の司令塔の役割を担った。当時の経済財政諮問会議は、さながら小泉「構造改革」の別働隊の役割を果たしたのである。

竹中慶応大学教授は、「金融や貿易の自由化、規制撤廃、民営化を強く求めるほか、債務の証券化」等々を強引にすすめる、強烈な新自由主義経済学の信奉者だ。竹中・新自由主義理論は、日本になにをもたらしたか。端的にいうと、全給与所得者の35%ちかい1,000万人を超える人びとが、年収200万円以下という驚くべき社会構造が出現したことだ。新自由主義は、日本において雇用破壊（とくに若者のパートや派遣等の非正規就労が常態化）に現れ、先進国のなかでもきわめて特異な格差社会をもたらしたのだ。

安倍首相は、産業競争力会議に竹中教授を、経済財政諮問会議に伊藤元重東京大学大学院教授をそれぞれ任命している。上記2つの会議に農業関係者は1人もいない。両会議は、新自由主義にもとづき日本社会にいつその競争原理をもちこみTPP推進の別働隊の役割を果たすおそれがある。竹中教授は、その意図を隠さない。同氏は「TPPに前向きに参加し、それをてこに民営化と包括的な規制緩和を進めることが不可欠だ。自由貿易の恩恵をこれほど享受してきた国で、一層の自由化を進めるTPPにこれだけ反対があるのは、不可思議と言うほかない」（毎日新聞社『週刊エコノミスト』2013年1月1・8日合併号、P.85）と、並々ならぬ決意を披瀝している。伊藤教授は、学界では数少ないTPP推進の旗振り役を買ってでている人だ。

アベノミクス（安倍首相の経済政策）が、産業競争力会議や経済財政諮問会議などを動員して鳴り物入りでTPP推進を図ろうとしても、先の総選挙で示された民意とかけ離れていることには変わりはない。TPP反対の公約を掲げ当選した衆議院議員は、その公約を順守してほしい。参議院選挙が今年夏に行なわれる。現実にはジグザグの過程をたどると思われるが、TPP推進勢力に「参加を断念」させるたたかいの手を緩める訳にはいかない。

注：本稿は、デーリーマン社『ニューカントリー』2013年2月号掲載の拙稿「農政はどこに向かうのか 国際交渉の行方と対応」をもとに加筆・補正している。

### ■中原 准一 氏 プロフィール

1946年、北海道富良野市生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士課程（農学経済学専攻）。酪農学園大学講師、助教授、教授を歴任。デンマーク王立農業獣医学部に留学。酪農学園大学を定年退職後、同校の特任教授。日本農業市場学会員、北ヨーロッパ学会等に所属。北海道農業ジャーナリストの会幹事等も務める。



食の思い出の季節の話題

# 食のつれづれ日記



## にんにく奮戦記

札幌市西区 サンシン油業(株) 上村 雅彦

と一しろが、にんにくを作って早3年がたちました。私が300坪の畑を借り小農業のまねごとを始めたのは、農業に色気をだしたことに間違いありません。

近年の農業ブーム、企業農園ブームがマスコミ等で取り上げられている中、20年前から小別沢(西区)で30坪の家庭菜園をやっていた私は乗り遅れるものかと、お客様(友人)の牧草地を無理くり300坪だけ使わせてもらうことにしました。本業のこともあるので、芋、カボチャはあまり手間がかからないことは経験済みでしたが、売値が安い。んー、そうだ。青森のにんにくなら1個200円以上はすると、1年目は土造りもままならぬまま青森の「がっこ」を10万円も買い入れ、マルチゾーン、石灰多いゾーン、EM多いゾーンに挑み、まともなものは1割ぐらいしか採れませんでした。2年目はにんにく畑を100坪5レーンのみで色々試し、3年目ようやく売り物が数百個生産できました。とはいえ中途半端な畑なので専用機械も購入できず真夏の暑い中、剣先スコップで1株ずつ掘る作業には本当に飽きてしまったのかもしれない。ただ地主のばーちゃん(85歳)に1束もっていった時、「本当にあんたが作ったのかい？」と2回も聞かれ「どうやって作った？何をどう入れた？」と本当に感心された時は「やったね。やればできたんだ」と心の中でほくそえんでおりました。にんにくは不思議な植物です、風が強過ぎると茎に種を作ったり、環境に対してすぐ変わった形に変化します。ま、もともと今食べているにんにくはクローン(チューリップと同じ)みたいなものですが。

そうそう、近頃の野菜の種(種子メーカー品)は2代目が出来ないことを皆さんご存知ですか？どんな加工をしているのか解りませんが、種メーカーが儲けるため？に何かしちゃって子孫を残せない野菜ばかりなのです。それに比べたらあの手この手で子孫を残そうとするにんにくは、遅いゆえにパワーもいただけるのかと感心しています。

今年は60坪程度とどんどん縮小してはいますが、有機ポリマルチゾーン、多年ボウソウシートゾーン、とことん草無しシートゾーンと不耕起栽培に近いものにチャレンジ中です。3年前の成功パターンを作って、ゆくゆくは『農業法人作成』などという考えはとうになくなりましたが、趣味の延長的なところで、いろいろ試してやろうと続けております。

# 「自給ネットワーク会員交流 生産者訪問ツアー」報告

札幌市 村田 均

ほんのりと秋の寒さが感じ始められた2012年10月13日、自給ネット会員交流・訪問ツアーが実施されました。会員暦10年以上の人から知り合いの勧めで参加した人まで男女18名と、余市・仁木の自給ネットの生産者会員を訪問してきました。

出発の朝は、今にも降りそうな曇り空。今日一日の天候がもつようと祈りつつ、まず余市町の仲野ファームを目指しました。行きの車中では、酪農学園大学特任教授の中原准一氏によるTPPミニ講座が開かれました。TPP締結というと北海道農業への打撃、ひいては日本の食料自給率低下に繋がるというイメージが先行していましたが、農業以外に医療や保険、雇用と私たちの生活に関わる分野への影響が大いにあること、そして国家間でなされているTPPの裏で多国籍企業が日本市場への進出を行える基盤作りが進められている現状とその危険性を学ぶことが出来ました。参加者からは、日本農業の進むべき姿等の意見質問も出て、元気な農家さんが積極的に海外に打って出ることや地元との結び付きを強くした農業をするなど、色々な形態があつて良いということ、それ以上に我々消費者がTPPに関心をもち、食について考える機会を増やしていくことが今後の日本農業を支えていくものだと考えさせられました。

そうこうするうちに仲野ファームへ到着。余市の海を見渡せる風光明媚な高台にあるこちらは、39棟のハウスで加工用トマトとトマトベリーという高糖度の生食用トマトを作っています。水を必要最低限しか与えないことでみっちりと果肉が詰まったトマトは、水に入れると自重で沈んでしまうほど。高糖度トマトを見かけるようになって久しいですが、仲野さんのトマトベリーは衝撃的な甘さと後味の酸味が絶妙に絡み、今までにない深みのある美味なるトマトでした。仲野さんは「今年は雨が多く苦心したが、今までの経験を活かし、例年と同じく美味しいトマトが作れた」と語ってくださいました。こんな美味しいトマトを作れるにもかかわらず、今でも九州へトマトの勉強に行かれるほど研究熱心な仲野さん。そんな仲野さんのトマトはこれからも進化を続けていくのだろうと感じました。

その後コミュニティレストランと宿泊所（B&B）を備えた余市テラスで昼食。自給ネット会員の伊藤規久子さんが2008年に札幌から移住し、夫の真人さんとと

もに切り盛りしています。お店のコンセプトは、地元の安全安心な食を織り交ぜ、地域交流の場を提供するという。店内ではうたごえ喫茶やjazzライブが定期的に行なわれています。

おまかせランチは、余市近辺で取れた農産物を中心に南瓜と蕪のフライ。トマトソースをかけて食べる玄米、キッシュ、サラダ、葡萄のゼリーが出されました。筆者自身、特に気に入ったのがトマトソースをかけて食べる玄米でした。普段あまり口にしない玄米ですが、トマトソースをかけ良く噛むことで米、トマト双方の味が口いっぱいになり、いつまでも噛んでいたい気分でした。



余市テラスでのランチ



藤崎農園でティータイム

コミュニティレストランネットワーク北海道の代表である伊藤規久子さんは、地域の食卓を目指し、地域の交流の場がより広げられればと活動されて、『孤』が表出している現代社会の問題解決に一役を担っていると感じました。

最後に訪れたのは、自給ネット代表の藤崎さんの農園です。こちらではサクランボを中心に葡萄やブルーベリーを生産しています。11年前に新規

就農で引き継いだ農園をサクランボ中心の営農に切り替え、化学肥料ではなく蕎麦殻を用いた土壌改良を行ってきました。サクランボ農場を歩きながら説明を受けましたが、その土はフカフカで靴が沈んでしまうほどでした。ツアーで訪れた時期はナイヤガラ、キャンベルの収穫の終わり際ということでしたが、参加者は香が漂うぶどう棚から食したぶどうの甘さを満喫していました。

趣味のラン栽培から始まり農家へ転身した藤崎さんとの話は尽きず、今後はアスパラやブルーベリーも作っていくという姿に筆者自身は羨ましさをおぼえました。帰宅後作った葡萄ジャムは、砂糖をあまり入れなくても十分な甘さと香りがあり、出来上がりに大変満足しました。

今回の訪問では、それぞれの方が大変な信念を持って自身の仕事に取り組まれている姿を見ることができました。そして、紙面や人伝てに話を聞く以上に面と向かって話し、現場を見ることで食・農業・地域についてより深く考えることが出来ました。今後もこのような身近にいながら、なかなかお会いできない生産者さんとの交流を積極的に出来ればと、改めて感じたツアーになりました。



## 大豆プロジェクト活動報告

プロジェクトスタッフ 清水のり子

### ◆大豆畑の見学と交流会

平成16年から生産者組織が岩見沢市の「北村砂浜地区21世紀協議会」になり、交流会は毎年晴天に恵まれています。2012年8月25日(土) 集合場所の砂浜公民館から大豆畑に移動し、生産者の山崎さんから、大豆の生育過程について「今年は3月に97cmの残雪があり、初めて畑に融雪剤をまいた。は種が遅れた分、今の段階では枝豆には少し早いですが、積算温度に合わせて大豆は生育するので、9月の天候に期待したい。」と話してくれました。その後、秋の好天を祈りながら、みんなで枝豆を収穫しました。



次に毎年野菜のもぎ取りをお願いしている池田さんの圃場へ行き、約60種類の野菜を育てている壮大な畑に感激。落花生や大きな大根の抜き取りに、みんな子どものように歓声を上げていました。昼食は、とれたての野菜たっぷりのヘルシーバーベキューと大豆を使ったご飯と大豆ドレッシングサラダの定番メニュー。

消費者からは「大豆料理をお寺に持って行ったら、大豆が美味しいと住職さんに褒められた」「大豆トラストに参加して大豆料理のレパートリーが広がった」と、大豆の美味しさに感激する声が聞かれました。生産者の山崎さんからは「大豆は豆腐だけだと思っていたが、縁あって大豆トラストと関わって、大豆をこんなに美味しく料理してもらって感激している。」と生産者と消費者の心かよう交流会になりました。毎年十数名の参加者ですが、この交流会はずっと続けて行きたいと改めて感じました。



### ◆13回目の生豆発送終わりました。

2012年11月23日、13回目となる生豆の発送作業を行いました。午前9時、生産者の山崎さんと渡辺さんが平成24年度産の大豆を運んで来てくれました。今年は9月の記録的な暑さと集中豪雨に見舞われながらも「作り支え」「食べ支え」の絆に支えられ、トラスト大豆約200kgの発送作業を無事終える事ができました。今後は、2月2日の「作り支え」「食べ支え」の輪を広げるイベントに向けて、準備をしていきたいと思ひます。

大豆トラスト運動は、作り支える生産者、食べ支える消費者どちらが欠けても成り立ちません。13年目を迎えられることに感謝し、スタッフ一同今年も頑張りたいたと思ひます。



## 2012年度の食育講座を振り返って

プロジェクトスタッフ 谷藤 美貴子

6月23日、2012年度食育講座の第1回目のテーマは「料理の基本から学んじやおう」。お米のとぎ方や出汁の取り方などを教わり、昨年受講していた子たちは手馴れた感じで、そして初めて参加の子たちに少し教えながら、また初めての子たちは緊張しながらも楽しそうに学んでいる姿が微笑ましく見えました。環境NGO「エゾロック」の方たちから食と環境のつながりについてのお話を聞き、水を大切にしながら食器を洗う方法や出汁をとった“かつおぶし”と“昆布”をつくだ煮にして、捨てずに美味しいものができることなどを実感してもらえた講座でした。

第2回目のテーマ「くらべてみよう味と栄養」では、畑で完熟した朝もぎのトマトとスーパーのトマトを食べ比べて味の違いを確かめました。トマトが食べられない子も少しだけチャレンジをしようと、楽しさや意気込みが感じられました。

第3回は「いざ、鶏と野菜たちの農園ワールドへ!」と題し、岩見沢市の有機農家、白石農園へ。鶏が生んだ卵を自分たちで取り、野菜を収穫。昼食の残りを鶏たちに餌として与え、食の循環を体感してもらえた講座でした。

日高町の漁師、石崎さんが講師の第4回「北海道の旬な魚たち」では、目の前で繰り広げられる包丁さばきに歓声も。いくらを食べるのも触るのも苦手な子が、頑張っつて触っているのを見てスタッフも感動しました。

受講場所にも雰囲気にも、そして仲間にも慣れた第5回「北海道の豆は日本一!」。北海道の豆の種類の豊富さと栄養機能の高さに、驚きと興味を持ってもらえた内容でした。

そして最終回の第6回「旬とからだの不思議なつながり～お寿司でパーティーをしよう～」では、班ごとにどのようなお寿司を作るか皆で考え、調理。個性豊かなオリジナル寿司が出来上がりました。最終回での子どもたちの包丁使いや料理の腕は、今までより更にグンと上がったようでした。この日は保護者も参加して、みんなでお寿司を食べ修了式をお祝いしました。



午後からは6回の講座で学んだことを振り返り、旬の食べ物が身体にととても良いことを再確認。最後に修了証の授与と記念撮影をして2012年度の食育講座は終了しました。子どもたちからは「すごく楽しかった!」「来年も絶対来っつてママに言ったよ～」と嬉しい言葉も。笑顔で手を振るスタッフに見送られ、子どもたちはそれぞれの家庭に帰っていきました。



## 北海道電力〈泊原発〉の問題は何か

泊原発の廃炉をめざす会編  
(寿郎社 1680円)

3・11以降、原発に関する本はあまた出版された。原発の危険性を説くものから、脱原発への動きをとらえたものまでさまざまだが、「泊原発」に的を絞った本は一冊もなかった。道内の出版社からすぐにでも出るだろうと思っていたが、その動きはまったくなかった。それもそうだろう。「泊原発」を語ることは、即北海道電力を語ることにつながる。どの出版社も及び腰になるのは想像に難くない。それでもやはり、泊原発は大丈夫なのか、フクシマのような事故は起きないのか—そのような疑問を払拭できなかつたし、多くの道民が持ち続けてきた気持ちではなかったか。そういった思いに応えられる本を出せないものか。漠然とそんなことを考えていた2012年5月末ごろ、札幌で出版活動続ける友人の寿郎社社長・土肥寿郎さんと雑談していると、「泊原発の本を出したい」と持ちかけられた。土肥さんは東京の出版社で長らく社会派編集者として活躍した人物で、私と同じような思いを持ち続けていたという。

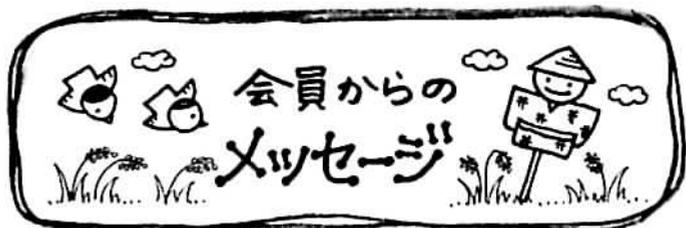
そして真っ先に「泊原発の廃炉をめざす会」共同代表を務める小野有五先生に、出版の相談をした。同会は11年11月、612人が原告となって泊原発の廃炉を求める訴訟を起こしており、その中心人物が北大名誉教授の小野先生だった。「よし、やろう」。即答だった。執筆陣は小野先生を含めた原告団と弁護団の研究者や弁護士たち、発刊は提訴1周年にあたる12年11月—小野先生が示したその案に沿い、6月末から急ピッチで編集作業を進め、5カ月後、何とか予定通りに出来上がった。

この本では、地質学者の小野先生が巨大地震と津波によって泊原発が破壊されるリスクの大きさを示し、原告団副団長を務める常田益代・北大名誉教授が道民の安全な暮らしを脅かす原発の存在は、倫理的にも認められないと訴える。また弁護団の林千賀子弁護士は安全性を確保できない検査体制になっている泊原発は構造的にも危険にさらされていると指摘し、菅澤紀夫弁護士は過去の電力需給などを元に原発がなくても北海道の電力は足りることを証明している。

カラーグラビアには世界の地震発生地と原発立地の分布図を掲載したが、それを見ると日本ほどその2つの地点が重なっている国はどこにもない。世界の原発のほとんどが安定したプレート上に建設されているのだ。北海道はもとより日本の原発すべてが不安定なプレート境界上にある「地震付き原発」という現実、背筋が凍る。

編集担当 安川 誠二





「私〇〇にはまっています。」

札幌市白石区 上野 千賀子

何かしたい。一人で。コツコツと。人と競うことなく。マイペースで。楽しく。と、ずっと思い探していました。何だろう？何だったら、はまるのだろうか？それが英語だったのです！なぜ英語？わかりません。特に外国に行って話したいという訳でもなく。でも、はまったのです。私のDNAのどこかにヒットしたのでしょうか？それも家から歩いて15分の所にあるメジャーではない英語スクールに。先生たちはとても素敵で。生徒さんたちも素敵で。そしてコツコツ勉強することが楽しく。英語で話が出来た時、うれしく。

学生時代、夜に弱く朝早く起きて、いつも勉強をしていました。それが今朝、食事の30分前に勉強をしたり、仕事から帰って、すぐパソコンの前に座って15分勉強をするのが心地よく。私って勉強好きだったのかなあ？学校に集まる人たちはほんとに様々なジャンルの人達で、その人達とつたない英語で話して、色々な事を教わるのも楽しく。そしてなかなか覚えられないことを年のせいにして自分に甘え。ほんとに覚えられないんですよね。息子に「日本語も「あれそれ」が多くなったのに、チャレンジャーだねえ。」と皮肉られ。今、英語にはまっています。

## 「次世代に引き継いでもらいたいこと」

千歳市 (株)北海道箱根牧場 代表 勝俣 克廣

私は、神奈川県箱根町より現在地の千歳市東丘に、昭和44年牧場を移転して来ました。夢と希望を持ち、草地の造成からスタートしたのですが、暫くすると牛たちが体調を崩し始め、死に至ることもあり大変苦労をいたしました。そこで牛たちの健康を考えて、自社農場の農地に有機農法を取り入れた飼料作りと輪作体系の一環として農産物の栽培をしながら、府県を中心に流通も行ってきました。

平成13年に有機JAS法が施行され、やっとまともな有機商品が市民権を得たと喜んでいましたが、10年と経たないうちにリーマンショックから始まったデフレスパイラルに陥り、食の安全安心よりも諭吉さんが大事のようで、通常栽培品より若干高い有機商品は敬遠されるようになってしまいました。

先日、私の手元に介護保険証が送られてきました。いずれ次世代にバトンを渡すのですが、このままの有機栽培を継続して欲しいと願う反面、継続を命ずることは無理なように思えます。私の持論である「有機農業によって」食の安全と環境保全することは難しいのが現状です。

**「幸せの経済学」上映会&トークショー**

全国各地で自主上映がおこなわれ、静かな共感が広がっている映画「幸せの経済学」。今回、TPPを考える市民の会と、貧困問題に取り組んでいるビッグイシューさっぽろの共催で、上映会&トークショーを開催します。

映画は、人々が豊かに暮らしていたインドの辺境ラダック地方が、グローバル経済の波に吞まれ、みるみるうちに貧富の差が開いた社会になっていく現実を問うています。TPPと貧困問題の根底に共通してあるのもこのグローバル経済です。料理研究家の枝元なほみさんをゲストに迎え、第1部ではTPPがいかに私たちの生活を直撃するか、第2部では貧困問題の実態をテーマにトークショーを行い、グローバル経済と、私たちが目指したい幸せの経済について考えます。

と き：2月3日(日) 第1部 13:30~16:00 第2部 17:00~19:30

会 場：かでの27 520研修室(札幌市中央区北2条西7丁目)

参加費：各部1000円(1部2部とも参加の場合は1500円)

お申し込み、お問い合わせ：090-2818-5502(大熊)

**事務局からのお知らせと会費納入のお願い****☆総会日程が決まりました！**

日 時：2013年4月6日(土) 13:30~

会 場：エルプラザ 中研修室(4F)

2013年度活動と自給ネットの方針を議決します。是非ご参加下さい。また、総会終了後に「講演会」を予定しています。詳細は後日議案書を郵送します。

**☆2011年度及び2012年度未納会費のお願い。**

1月12日現在未納会員の方には、封筒表に印字し、振込書を同封しています。

尚、振込額に次年度2013年度会費分を合算することも可能です。



2月3日におこなわれる上映会&トークショーに先立ち、昨年11月、TPPを考える市民の会のメンバー5人で、来日されていた「幸せの経済学」のヘレナ・ノーバーク・ホツジ監督にお会いしてきました。

分刻みの超多忙スケジュールにも関わらず、ヘレナさんは疲れた様子も見せず、とてもあたたかくフレンドリーに私たちを迎え入れてくれました。メノビレッジ長沼のエップ・レイモンドさんが聞き手となって一時間にわたって行ったインタビュー録画は、10分程度にギュッと凝縮して、上映会の当日に流す予定です。

映画、トークショーと合わせ、ヘレナさんからのメッセージを是非みなさんに聞いていただければと思います。  
(事務局長 大熊 久美子)